

## 官学民の連携による 地域に根ざした健康教育演習の実際と学習効果

清水 光子 櫻井 繭子 田仲 里江 山田 典子  
札幌市立大学看護学部

**抄録:** 本研究は、本学の健康教育演習における学生の学びの実態と、高齢者の健康づくり行動への影響及び官学民の連携の方向性について調査検討することを目的とし、平成 23 年度の健康教育演習に参加した本学の学生と協力が得られた老人クラブ会員にアンケート調査を、行政の担当者にインタビュー調査を実施した。多くの学生は、対象集団のアセスメント、健康教育指導案の企画と内容に適した媒体を作成すること、適した方法で健康教育を実施することが出来たと回答した。老人クラブ会員と学生の双方向コミュニケーションにより、学生は健康教育に必要な情報を対象のイメージと共に収集でき、対象に適した方法を考えることができたと推察される。老人クラブ会員は、学生との交流の満足度が高く、自身の身体や心の状態などを学生に伝えることが出来ていた。また、学生が実施した健康教育への満足度は高く、これからの生活に役立つと回答していた。高齢者にとって学生との「交流」や「健康講話」は、健康づくり活動や社会参加、及び社会貢献の場になっており、参加者のニーズや期待に沿ったものであったと考えられる。行政の担当者は、学生とクラブ会員の交流会は高齢者にとっては世代間交流になり、学生にとっては高齢者理解のために効果的であると考えており、多くのクラブが本事業に参加できることを望んでいた。今後は、学生も高齢者も満足度が高まるように、老人クラブ、行政、大学がさらに連携を深めていきたい。

**キーワード:** 官学民連携、健康教育指導法演習、老人クラブ、交流会

## Actual Situation and Effects of Locally Oriented Health Education Practice by the Collaboration of Administration, Academics and Private Sectors

Mitsuko Shimizu, Mayuko Sakurai, Rie Tanaka, Noriko Yamada  
School of Nursing, Sapporo City University

**Abstract:** The goal of this study is to investigate and review the reality of the students' learning situation, effects on the health developing activities by the people of advanced age, and the directionality of collaboration among administration, academics and private sectors, in the health education practice of this university. We implemented a questionnaire/survey on our students who participated in the health education practice in 2011 and the senior citizen's club members, who agreed to cooperate with us. We also interviewed the administrators in the government. Many students answered that they were able to create media that fits the assessment of the target group and the plans and contents in the health education guidance proposal. The senior citizen's club members were highly satisfied about the interaction with the students. They were able to convey their physical and mental conditions to the students. Their satisfaction level on the health education provided by the students was also high, indicating it would be useful in future living. For the people of advanced age, "interaction" and "health talk" with the students are their opportunities to participate in health promotion activities or society and social contributions; therefore, these activities seem to meet the needs and expectations of the participants. Administrators of the government believe that interactive meeting of the students and the club members serves as an interaction opportunity with different generations for people of advanced age and an effective opportunity to understand the people of advanced age for the students, and was hoping that many clubs would be able to participate in this project.

**Keywords:** Collaboration of administration, Academics and private sectors, Health education guidance method practice, Senior citizen's club, Interactive meeting

## I. 緒言

保健師の看護活動は、地域の人々の疾病予防や健康増進への支援であり、人々自らが健康や生活上の課題を認識し、日頃の生活習慣などを改善する行動が主体的にとれるようにすることである。人々のそれらの能力を向上させるために、保健師は家庭訪問、健康診査、健康相談などにより保健指導を行っている。人々の行動変容は、対象の個人・家族への支援と共に、集団への学習支援が効果的であることが知られており<sup>1)</sup>、地域では集団健康教育の形で対象に提供することが多い。その支援のあり方を考えるのは健康教育を担う保健師の課題である<sup>2)</sup>と言われている。看護教育における健康教育の技術習得は、主に保健師教育に位置づけられ、健康教育の理論や方法論の講義及び学内演習の後、地域看護学臨地実習で住民を対象として体験的に学ぶ方法をとる大学が多い。健康教育の諸記録から学習効果を分析した報告によると、健康教育の内容に関する知識が不十分のまま健康教育の実施に臨んでいる<sup>3)</sup>、対象者の健康課題の把握が十分でない<sup>4)</sup>、目的・目標を明確化していない<sup>5)</sup>など健康教育の基本的な技術の習得に課題を残していると考えられる。

本学の健康教育指導法は、看護の基盤となるもの（ヒューマンケアの基本）に位置づけられ、地域看護学領域で担当している。地域の人々の健康や生活状況から、健康課題を抽出し、効果的な健康教育の計画・実施のプロセスを学ぶには、フィールドでの演習が効果的である。そこで、A市B地区の「市立大学と進めるすこやかで安心なまちづくり事業」の一環として、A市B地区C部、及びB地区老人クラブ連合会と大学が連携して、「看護学部学生による健康に関する交流会」（以下「健康に関する交流会又は交流会」という）を、平成20年度から22年度まで実施することとした。

健康に関する交流会の目的は、学生にとっては、高齢者の生活や健康に関する理解を深め、看護援助の方法を学ぶ場とすること、特に①対象の健康課題の特定、②健康教育の企画、運営、評価を重点目標とした。市民にとっては、生活習慣病や介護予防に役立つ情報が得られると共に、大学の教育に協力するという社会参加や地域貢献の機会<sup>6)</sup>とした。また、A市B地区C部にとっては、地域における保健・医療・福祉に関する課題に対応していくために、大学との連携協働の仕組みづくりの構築を目指すものとした。さらに、健康に関する交流会は、学生と市民の世代間交流の機会になり地域福祉に貢献できると考えた。

演習は、協力が得られた7～10か所の老人クラブに学生が訪れ、高齢者と交流しながら高齢者の健康と生活の実態を情報収集する。その後大学でクラブ会員のニーズに対応した健康教育を企画し、再度老人クラブに学生が訪れ健康教育（健康講話）を実施し、評価するものである。

「市立大学と進めるすこやかで安心なまちづくり事業」は平成22年度で終了したが、「交流会」は、大学及び老人クラブの要望により継続実施している。3年間の本演習における学生の意見は、「高齢者を理解できた」「健康教育の理解が深まった」などの学習効果がみられる反面、「アセスメントと健康教育実施の期間が空きすぎる」「1グループの学生の人数が多い」など運営に関する課題を残す結果となった。老人クラブ会員は、学生の訪問を楽しみにしていたが、参加クラブの固定化と開催日時に課題があった。また、官学民の連携のあり方については明らかな評価が得られていない。

そこで、本研究は、本学の健康教育演習における学生の学びの実態と高齢者の健康づくり行動への影響、及び官学民の連携の実際について調査をし、健康教育演習における課題を明らかにすることを目的とした。本研究の結果は、大学にとっては効果的な健康教育演習を検討する資料となり、老人クラブには本演習を含めて今後の活動に反映できる内容を提供できる。また、官学民の連携のあり方についても再検討する資料が得られると考えた。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象者

- 1) 平成23年度の健康教育指導法の演習に参加した本学看護学部3年次生 91名
- 2) 平成23年度の演習に協力した7老人クラブの会員のうち、2回目の「健康に関する交流会（健康講話）」に参加した方 145名
- 3) A市B地区C部で老人クラブを担当している行政の事務職員（以下担当者という） 2名

### 2. 対象の選定方法と選定理由

対象1)は、学習効果を判断するため演習に参加した看護学部生とした。

対象2)は、A市B地区C部がB地区老人クラブ連合会を経由し、本演習に協力を申し出た老人クラブの会員である。本演習についての評価などを目的とすることから「健康に関する交流会（健康講話）」に参加した高齢者とした。

対象3)は、官学民の連携の成果や課題についてのデータを収集するため、B地区C部D課56名のうち、老人クラブと大学とのコーディネーターとして活動した事務職員2名とした。

### 3. 実施場所

対象1)は、本学の教室とした。

対象2)は、各老人クラブが実施されている会館などとした。

対象3)は、B地区行政機関の会議室とした。

#### 4. 研究期間及び調査期間

研究期間：平成 23 年 11 月～平成 24 年 3 月

調査期間：平成 24 年 1 月～3 月

#### 5. データ収集の方法

学生の協力者の募集については、平成 24 年 2 月の「健康に関する交流会（健康講話）」の報告会終了後に、研究に協力してもよいと自ら判断した学生に、研究の目的や方法、倫理的配慮を教員が説明し、研究者が独自に作成した無記名自記式質問紙を配布した。記載した調査表は廊下又は学生ラウンジに設置した回収箱に投函するよう依頼した。

老人クラブ会員には、平成 24 年 1 月の「健康に関する交流会（健康講話）」の終了後、研究の目的、方法、倫理的配慮を文書及び口頭で説明し、研究者が独自に作成した無記名自記式質問紙を配布した。記載したアンケート用紙は、老人クラブ終了までに会場に設置した回収箱に投函するように依頼し、研究者が同日のクラブ終了後に回収した。

担当者には、研究協力の依頼文を郵送後、A 市 B 地区 C 部 D 課長と担当者の双方に電話にて研究の目的、方法、倫理的配慮を説明し、調査日時と場所を決定した。平成 24 年 3 月に、インタビューガイドに基づき、担当者 2 名同席にて 75 分間の半構造化面接を実施し、同意を得て IC レコーダーに録音した。

#### 6. 研究における倫理的配慮

全ての対象者に、研究の趣旨と目的、方法、及び以下の倫理的配慮を文書及び口頭にて説明した。

研究への協力は自由意志であり、研究への協力で強制力は働かないこと、研究に協力しない場合でもなんら不利益は被らないこと、また答えたくない質問には答えなくても良いこと、プライバシー保護の方法、アンケートは回収箱への投函をもって研究に同意したものとみなすことなどについて説明した。全てのデータは、鍵のかかる保管庫で保管し研究以外には持ち出さない、分析が終了した時点で録音内容は消去し、データはシュレッダーで廃棄処分をする。また、学会・論文発表の際には、個人や組織が特定されないよう匿名性を守ることを約束した。

学生には、強制力が働かないように事前に授業終了後に研究の説明があることをポスターで周知しておき、自由意志に基づいた協力学生に、研究の目的や方法、研究への参加が成績に影響しないことなどを科目責任者以外の教員が説明した。

老人クラブ会員には、記載したアンケート用紙は、自由意志に基づき老人クラブ終了までに会場に設置した回収箱に投函するように依頼した。研究に協力しない場合には、回収箱に投函しないか白紙のまま投函するように説明した。

担当者には、A 市 B 地区 C 部 D 課長及び担当者の双方に、研究への協力は担当者の自由意志であり、なんら強制力が働かないこと、研究に協力することにより一定程度の時間を費やすこと、いつでも研究の中止を申し出ることができることを説明した。

本研究は札幌市立大学倫理委員会の承認を得て実施した通知 No.1130-1)。

#### 7. 調査内容

1) 学生の調査内容は、高齢者のニーズ把握とアセスメント 12 問、健康教育の理解 18 問、参加者への効果 9 問、自分の役割・演習方法への意見 5 問の計 44 問とした。

2) 老人クラブ会員の調査内容は、会員の背景 4 問、健康に関する交流会の参加目的と満足度 4 問、健康教育の内容と日常生活への影響 8 問、演習への意見 2 問の計 18 問とした。

3) 担当者の調査内容は、事業の成果、困難だったこと、展望、官学民の連携に関する意見とした。

#### 8. 分析方法

1) 数的データは、PASW Statistics 18 (SPSS Inc, Chicago, IL, USA) を使用し、単純集計後、学生はグループメンバーとの関係性、クラブ会員は性別との関連について  $\chi^2$  乗検定を行った。有意水準は 5%未満とした。

2) 質的データは、逐語化し意味内容により分類整理した。

### III. 研究結果と考察

#### 1. 学生のアンケート調査の結果と考察

##### 1) 学生のアンケート調査の結果

##### (1) アンケートの回収率

調査票 91 部を配布、そのうち 55 部の返送があり、全てを分析対象とした。回収率は 60.4%であった。

##### (2) グループワークにおいて担当した役割

グループワークで役割を担当したと回答した人数は、①インタビューガイド作成 36 名 (65.5%)、②情報収集 51 名 (92.7%)、③アセスメント作成 30 名 (54.5%)、④指導案作成 31 名 (56.4%)、⑤教材作成 44 名 (80.0%)、⑥配布資料作成 29 名 (52.7%)、⑦シナリオ作成 27 名 (49.1%)、⑧その他 1 名 (1.8%)、その他の記載内容は「スライド原稿作成」であった。担当役割は最少で 2 つ、最大で 7 つを担っており、平均  $4.5 \pm 1.3$  であった (表 1)。

##### (3) 11 月の交流会において担当した役割

11 月の交流会で担当したと回答した人数は、①挨拶 7 名 (12.7%)、②司会 3 名 (5.5%)、③インタビュー 37 名 (67.3%)、④会場整備 41 名 (74.5%)、⑤対象者対応 41 名 (74.5%)、



表1 グループワークでの担当役割 (複数回答)

担当役割	担当あり	担当なし
①インタビューガイド	36(65.5)	19(34.5)
②情報収集	51(92.7)	4(7.3)
③アセスメント作成	30(54.5)	25(45.5)
④指導案作成	31(56.4)	24(43.6)
⑤教材作成	44(80.0)	11(20.0)
⑥配布資料作成	29(52.7)	26(47.3)
⑦シナリオ作成	27(49.1)	28(50.9)
⑧その他	1(1.8)	54(98.2)

名 (%) n=55

⑥その他3名(5.5%)、その他の記載内容は、「デモ実習」1名、「書記」1名、「全体の流れの把握」1名であった。未回答は1名であった。担当役割は最少で1つ、最大で5つを担っており、平均 $2.4 \pm 0.9$ であった(表2)。

#### (4) 1月の健康の講話において担当した役割

1月の健康の講話で担当したと回答した人数は、①挨拶5名(9.1%)、②司会5名(9.1%)、③インタビュー27名(49.1%)、④会場整備41名(74.5%)、⑤対象者対応46名(83.6%)、⑥その他8名(14.5%)、その他の記載内容は、「デモンストレーション」「デモ実習」「景品配布」「血圧測定」「講話」「全体の流れの把握」「発表者」「模造紙を見せる」が各1名ずつであった。担当役割は最少で1つ、最大で5つを担っており、平均 $2.4 \pm 1.0$ であった(表2)。

表2 交流会と健康の講話での担当役割 (複数回答)

担当役割	交流会(11月)		健康の講話(1月)	
	担当あり	担当なし	担当あり	担当なし
①挨拶	7(12.7)	48(87.3)	5(9.1)	50(90.9)
②司会	3(5.5)	52(94.5)	5(9.1)	50(90.9)
③インタビュー	37(67.3)	18(32.7)	27(49.1)	28(50.9)
④会場整備	41(74.5)	14(25.5)	41(74.5)	14(25.5)
⑤対象者対応	41(74.5)	14(25.5)	46(83.6)	9(16.4)
⑥その他	3(5.5)	52(94.5)	8(14.5)	47(85.5)

名 (%) n=55

#### (5) 健康教育演習全体での担当役割

健康教育演習のグループワーク、交流会、健康の講話での担当役割は最少で4つ、最大で15を担っており、平均 $9.3 \pm 2.6$ であった(複数回答)。

#### (6) ニーズの把握とアセスメントの学習状況

全ての設問において過半数以上が「できた」「ややできた」と回答していた。「できた」「ややできた」の割合が最も高かった設問は「問6. 対象者及び対象者の属する集団を全体として捉えることができた」であり、次いで「問7. 対象のニーズを客観的な知識や根拠に基づいてアセスメントができた」「問

8. 対象者集団の現在の状況についてアセスメントができた」「問9. 対象者集団の目指すべき状態についてアセスメントができた」であった。「あまりできなかった」「できなかった」の割合が最も高かった設問は、「問3. 社会資源について情報収集できた」、次いで「問4. 自然及び生活環境(気候・公害等)について情報を収集できた」「問5. 系統的・経時的に情報を収集できた」の順であった(図1)。

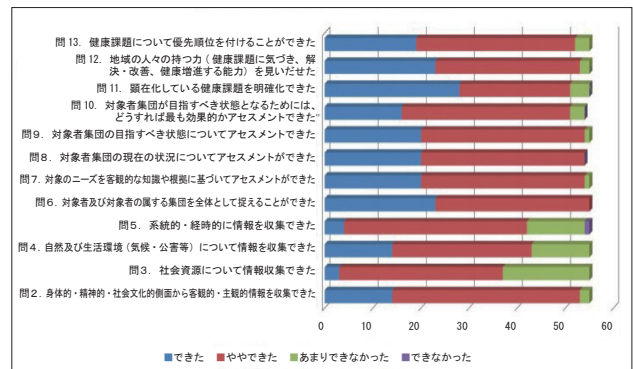


図1 ニーズの把握とアセスメントの学習状況

#### (7) 目的・目標の設定の学習状況

全ての設問において過半数以上が「できた」「ややできた」と回答していた。「できた」「ややできた」の割合が最も高かった設問は、「問15. 目的は、実施計画のねらいとする将来を方向付ける表現ができた」であり、「あまりできなかった」「できなかった」の割合が最も高かった設問は、「問17. 目標の設定には認知領域と情意領域と神経運動領域を意識できた」であった(図2)。

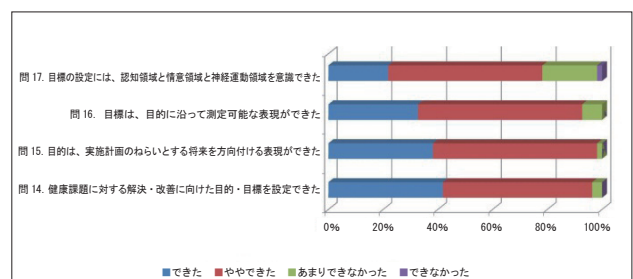


図2 目的・目標の設定の学習状況

#### (8) 内容・方法の設定の学習状況

全ての設問において過半数以上が「できた」「ややできた」と回答していた。「できた」「ややできた」の割合が最も高かった設問は、「問23. 内容に適した教育媒体を作成することができた」「問24. 健康教育の目標を達成するために適した方法で実施できた」であり、「あまりできなかった」「できなかった」の割合が最も高かった設問は、「問22. 時間配分は適切に実施できた」、次いで「問13. 健康教育の内容に関する知識を十分にもって臨むことができた」「問20. 対象者に目的・目標を伝えることができた」であった(図3)。

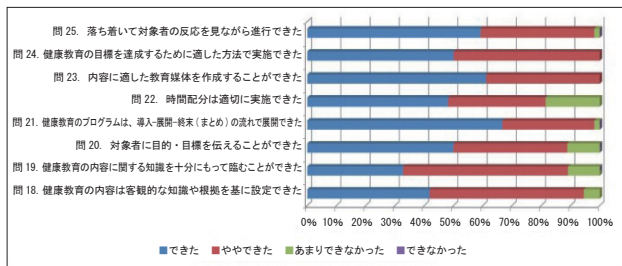


図3 内容・方法の設定の学習状況

#### (9) 評価の設定についての学習状況

全ての設問において過半数以上が「できた」「ややできた」と回答していた。「できた」「ややできた」の割合が最も高かった設問は、「問26. 対象者から得る健康教育の評価内容は、目標に合わせて設定できた」「問31. 健康教育の結果評価はできた」であり、「あまりできなかった」「できなかった」の割合が最も高かった設問は、「問28. 対象者から得る健康教育の評価は、適切な時期に設定できた」「問30. 健康教育の影響評価はできた」であった(図4)。

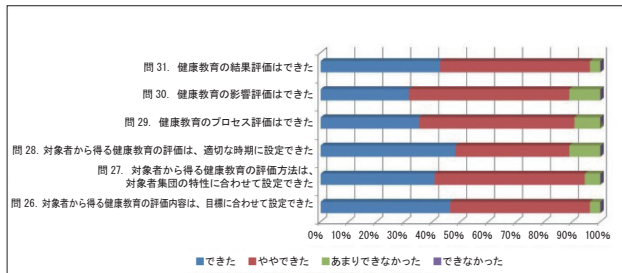


図4 評価の設定についての学習状況

#### (10) 健康教育の対象者への効果

全ての設問において過半数以上が「そう思う」「ややそう思う」と回答していた。「そう思う」「ややそう思う」の割合が最も高かった設問は、「問34. 対象者は満足度していた」「問35. 使用した教材は目標に適していた」であり、「あまりそう思わない」「そう思わない」の割合が最も高かった設問は「問33. 対象者の反応は積極的だった」「問40. 会場内の配置は適切だった」であった(図5)。

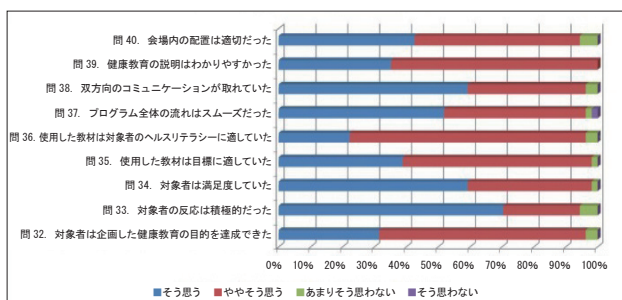


図5 健康教育の対象者への効果

#### (11) 健康教育の演習方法

全ての設問において過半数以上が「できた」「ややできた」と回答していた。「できた」「ややできた」の割合が最も高かつ

た設問は、「問41. グループにおいて自分の役割を遂行できた」であり、「あまりできなかった」「できなかった」の割合が最も高かった設問は、「問43. グループメンバーに満足できた」であった(図6). グループメンバーに満足があるほど、演習中にグループメンバーとの意見交換を多くしていた ( $p = 0.037$ ).

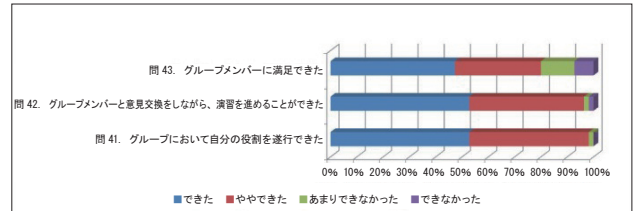


図6 健康教育の演習方法

#### (12) 健康教育演習の学習状況

健康教育演習全体を通しての学習状況は、表3のとおりである。回答は、4段階評定法(1:できた, 2:ややできた, 3:あまりできなかった, 4:できなかった)であり、その中央値と平均値を示す。

表3 健康教育演習の学習状況 n=55

	中央値	平均値
健康教育の指導案についての学習状況	1.70	1.68 ± 0.30
・ ニーズの把握とアセスメント	1.83	1.78 ± 0.31
・ 目的・目標の設定	2.00	1.75 ± 0.39
・ 内容・方法の設定	1.50	1.53 ± 0.38
・ 評価の設定	1.67	1.67 ± 0.46
健康教育の対象者への効果 (対象者の反応, 満足度, 教材等)	1.56	1.58 ± 0.31
健康教育の演習方法 (グループでの役割, 意見交換, 満足度等)	1.67	1.61 ± 0.49

#### (13) 健康教育の演習方法についての意見

演習方法についての意見(自由記載)を分析すると、以下のとおりであった。

- ① 1グループの学生数が多いことによる作業量と貢献度の不均等が、演習への不満につながっていた。
- ② 授業時間内に十分な演習時間を確保することで、グループメンバー全員で取り組める。
- ③ 他の科目との授業スケジュールの見直し。
- ④ 健康教育のイメージを持てたので、演習を継続してほしい。

#### 2) 学生のアンケート調査の考察

効果的な健康教育の提供のためには広い視点からの対象理解・把握に基づいたニーズの把握が欠かせない。今回の調査からは、対象者及び対象者の属する集団を全体として捉え、対象者集団の現在の状況、目指すべき状態やニーズをアセス

メントすることについての自己評価が高い結果であった。老人クラブ会員の健康にかかわる生活や、ヘルスリテラシーとともに今後の健康状態の予測を意識してアセスメントしていることがうかがわれた。学生の健康教育の対象把握の特徴について青山ら<sup>4)</sup>は、健康課題を視点に取り入れることは難しいと指摘している。その理由は、地域で健康に生活している対象者の生活実態をイメージすることの困難さであり、核家族化が進み祖父母との同居率が低い学生世代に対しては特に高齢者理解を支援する必要性を述べている。本学の演習は、健康教育実施前に老人クラブ会員と学生が直接会い、互いの関心や生活や経験などを開示しながらの双方向のコミュニケーションをはかる交流会を設けた事により、学生は健康教育に必要な情報をより具体的な対象のイメージとともに収集できていたことから、重点目標である健康課題の特定については評価が高かったと推察される。

健康教育指導案の内容・方法の設定では、内容に適した教育媒体を作成することができ、適した方法で健康教育が実施できたと多くの学生が回答した一方で、健康教育の内容に関する知識を十分に持って臨むことができたかは自己評価が低く、先行研究<sup>3)</sup>と同様の結果であり、指導方法について再考したい。

また1グループの学生数がグループワークの適正人数を上回る13名にのぼり、グループメンバーに対する満足度も比較的低い傾向であった。複数の学生で健康教育の指導案作成・実施・評価に取り組む場合、分担した役割に集中するので学生個々の力量がより発揮されやすい反面、作業が分断されて健康教育全般に必要な知識の獲得を妨げる可能性が先行研究により指摘されている<sup>3)</sup>。本演習では、一人の学生が複数の役割を担いながらグループワークを重ね共同で作業を進めており、グループの中で自分の役割を遂行できたことや、グループメンバーと意見交換をしながら演習を進めることができたと回答していた。しかし個々の学生が健康教育全般に関わることができなかったため、今後演習方法の改善に取り組むたい。

今後の課題としては、老人クラブ会員の理解と協力を得て、学生の学習効果とグループワークの運営について再検討することが必要である。また、先行研究には、保健師本来の役割である住民の主体性を促すための支援を学ぶ必要性<sup>7)</sup>や、地区活動の手段として健康教育を理解する必要性<sup>8)</sup>も報告されており、それらの視点も合わせて検討していく必要があると考える。

## 2. 老人クラブ会員のアンケート調査の結果と考察

### 1) 老人クラブ会員のアンケート調査の結果

#### (1) アンケートの回収率

アンケートは、2回目の看護学生との交流会（健康講話）

に参加した7老人クラブの会員145名に配布し、135名(93%)の回収率であった。135名全員を有効回答とした。

#### (2) 年齢と性別

クラブ会員の年齢は、60歳代8名(6%)、70歳代65名(48%)、80歳代61名(44%)、90歳代2名(1%)であった(図7)。また、老人クラブに加入した年齢は、59歳以下10名、60～69歳57名、70～79歳57名、80歳以上11名であった。

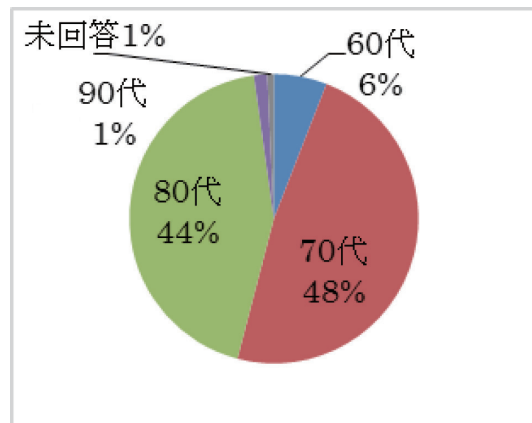


図7 年齢構成

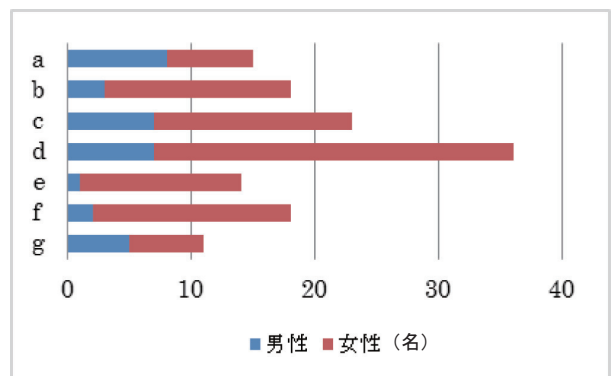


図8 老人クラブ参加者(性別)

性別は、男性33名(34.4%)女性102名(75.6%)であったが、2クラブは男女差がほぼなかった(図8)。

#### (3) 老人クラブ役員の経験

現在クラブの役員をしている55名(40.7%)、以前役員をしたことがある23名(17.7%)であり、役員経験者が58%であった。

#### (4) 老人クラブの参加状況

老人クラブに、ほぼ毎回参加している人が95名(70.4%)であり、半分くらい参加しているが23名(17.0%)、今回初めて参加した人が7名(5.2%)であった(図9)。

#### (5) 11月の交流会に参加した理由

交流会に参加した理由は、いつも参加しているから61名

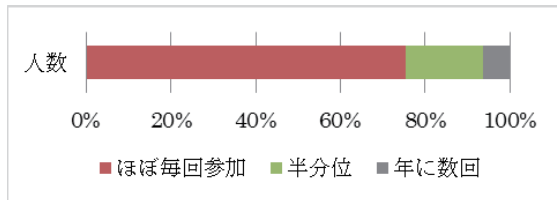


図9 老人クラブの参加状況

(45.5%), 友人知人に勧められた15名(11.1%), 学生に会いたかったから14名(10.4%), 学生の役に立ちたかったから12名(8.9%)であった(図10)。

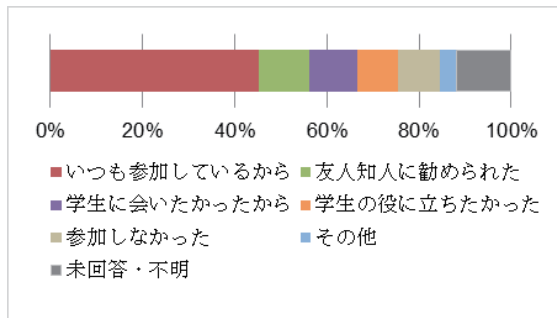


図10 11月の交流会に参加した理由

#### (6) 11月の交流会の満足度

交流会の満足度は、満足100名(74.1%), 少し満足15名(11.1%)であり、不満足と回答した人は0であった。参加しなかった人は9名であった(図11)。

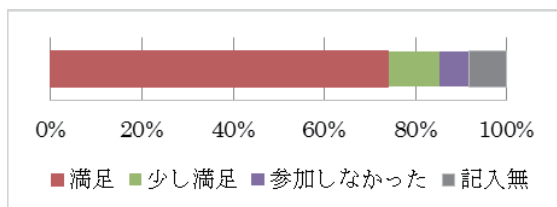


図11 11月の交流会の満足度

#### (7) 1月の健康講話に参加した理由

2回目の交流会（健康講話）に参加した理由は、いつも参加しているから69名(51.1%), 友人知人に勧められた11名(8.1%), 学生に会いたかったから13名(9.6%), 学生の役に立ちたかったから12名(8.9%)であった(図12)。

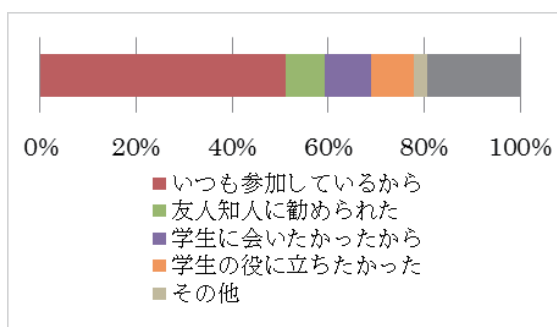


図12 1月の健康講話に参加した理由

#### (8) 1月の健康講話の満足度

健康講話に満足した人は98名(72.6%), 少し満足と答えた人は, 19名(14.1%)であった(図13)。

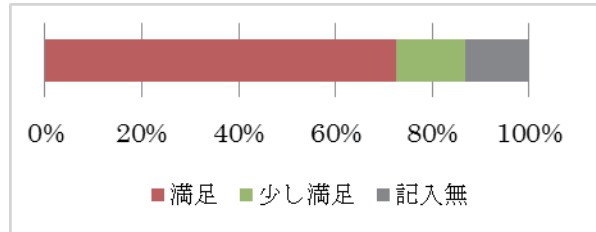


図13 1月の健康講話の満足度

#### (9) 健康講話のテーマへの関心度

関心があるテーマだった101名(74.8%), 少し関心があるテーマだったと答えた人は, 16名(11.9%)であり, テーマに関心がなかったという回答は0であった。無回答が18名(13.3%)であった(図14), (表4)。

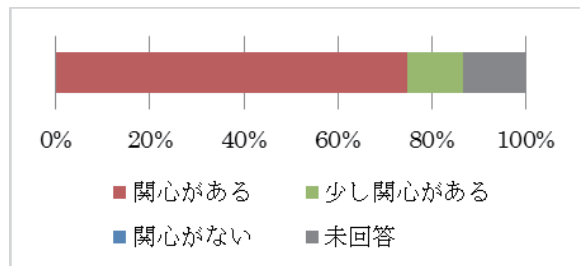


図14 健康講話のテーマへの関心度

表4 健康教育のテーマ &lt;学生の報告会資料より&gt;

クラブ	テーマ	内容
a	冬道らくらく歩行教室	転倒予防
b	認知症を知ろう!	認知症の方との接し方
c	健康は食事から!	貧血, 高血圧, 骨粗鬆症予防
d	元気ハツラツあましょっぱ(クラブ名)ライフ	高血圧, 糖尿病予防
e	新春!ベンチサッカー大会	運動, 転倒予防
f	「食べて」「動いて」から学ぶ認知症予防	認知症の予防
g	楽しく学ぼう認知症!	認知症の予防

#### (10) 学生の話し方や説明のしかた

わかりやすかった101名(74.8%), 少しわかりやすかった14名(10.4%)で, 少しわかりにくかったと答えた人は3名(2.2%)であった。無回答が16名(11.9%)であった(図15)。

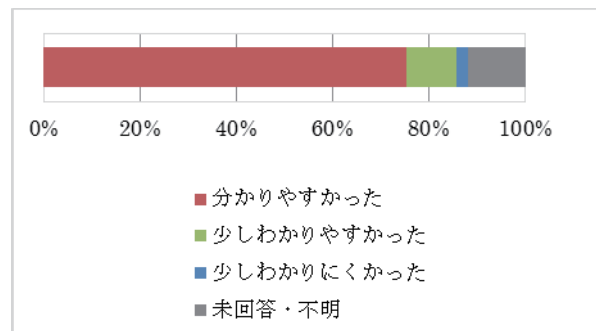


図15 学生の話し方や説明のしかた



#### (11) 使用した教材への評価

わかりやすかった 103 名 (76.3%), 少しわかりやすかった 10 名 (7.4%), 少しわかりにくかったと答えた人は 2 名 (1.5%) であった。無回答が 19 名 (14.1%) であった (図 16)。

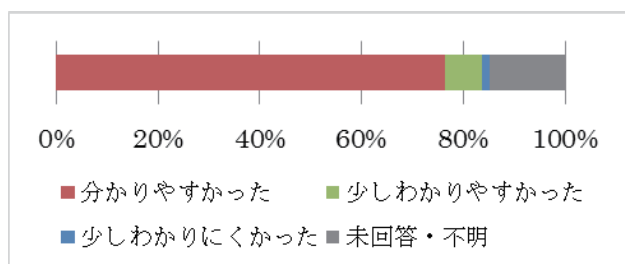


図 16 教材への評価

#### (12) 健康講話の難易度

やさしかった 88 名 (65.2%), 少しやさしかった 19 名 (14.1%) であり, 少しむずかしかったと答えた人は 8 名 (5.9%) であった (図 17)。

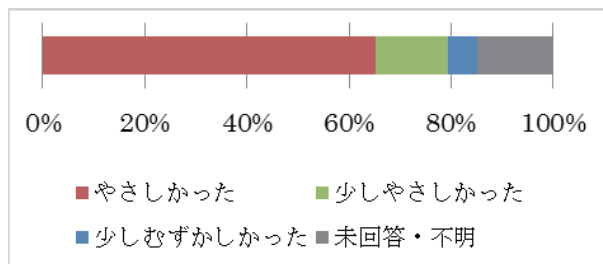


図 17 健康講話の難易度

#### (13) 健康講話の内容の理解度

理解できた 106 名 (78.5%), 少し理解できた 12 名 (8.9%) で, あまり理解できなかったと答えた人は 1 名 (0.7%) であった。無回答が 16 名 (11.9%) であった (図 18)。

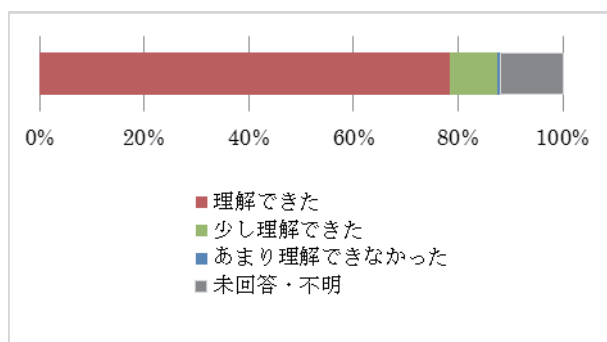


図 18 健康講話の内容の理解度

#### (14) これからの生活に役立つか

役立つ 110 名 (81.5%), 少し役立つ 8 名 (5.9%) で, あまり役立たないと答えた人は 1 名 (0.7%) であった。無回答が 16 名 (11.9%) であった (図 19)。

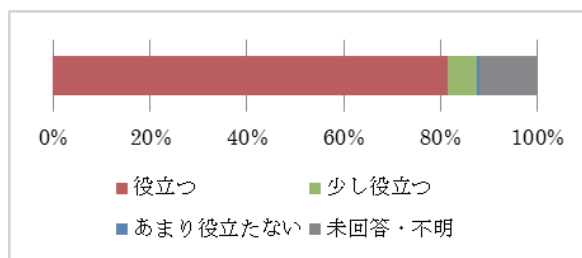


図 19 これからの生活に役立つか

#### (15) 学生に伝えることができたこと

今回の交流会で, 会員が学生に伝えることができたのは, 高齢者の身体や心の状態 69 名, クラブの活動状況 36 名, 人生経験 31 名, これからの抱負や考えていること 13 名, 医療や福祉の状態 13 名, 地域での支えあい状況 10 名などであり, その他への記載は, 「家族の絆」や「学生と心の交流ができた」などであった。一人平均 1.4 件の内容を学生に伝えることができていた (図 20)。男性は, 女性に比べクラブの活動状況を学生に伝えていた ( $p = 0.019$ )。

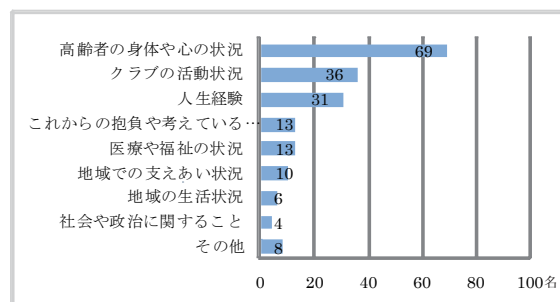


図 20 学生に伝えることができたこと (複数回答)

#### (16) 学生から得られたこと

今回の交流会で, 会員が学生から得ることができたのは, 話をして楽しめた 93 名 (68.9%), 病気の予防の知識, 健康に関する情報がそれぞれ 42 名 (31.1%), 学生の生活・勉強のこと 40 名 (29.6%) などであり, 一人平均 1.8 件の内容を得ることができていた (図 21)。

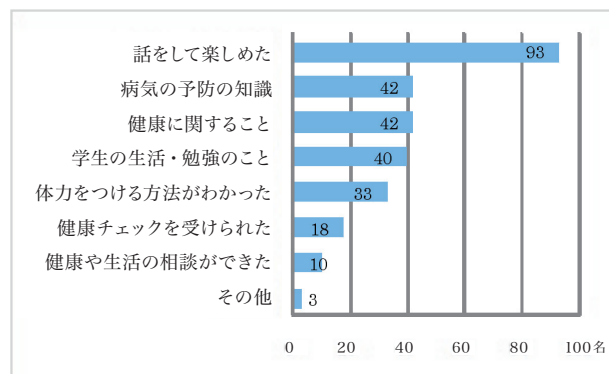


図 21 学生から得られたこと (複数回答)

#### (17) 交流会の企画に対する考え

健康に関する交流会の企画に対する考えは, 高齢者が学生を理解するよい機会になる 82 名 (60.7%), 学生が高齢者



を理解する良い機会になる 62 名 (48.1%)、地域と大学が関係を持つ良い機会である 54 名 (40.0%)、老人クラブが社会貢献する場 28 名 (20.7%) などであった (図 22)．男性は女性より、高齢者が学生を理解するよい機会になるという考えを持っていた ( $p = 0.019$ )．

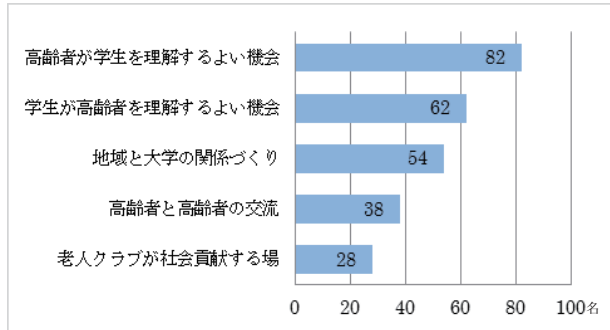


図 22 交流会の企画に関する考え (複数回答)

#### (18) 大学への要望や意見

25 名のクラブ会員から要望や意見が寄せられた。自由記載を分析すると、以下のとおりであった。

- ①学生と会えるのは楽しく、今後の励みや希望につながる。
- ②知識が得られ、体を動かす機会にもなった。
- ③学生にとって大切な機会であり、人生に役立ててほしい。
- ④学生への評価と励まし。
- ⑤交流会は良い成果が得られている。
- ⑥今後も継続を希望する。

#### 2) 老人クラブ会員アンケート調査の考察

老人クラブは、地域に居住する高齢者が自主的に集い、会員の教養の向上、健康の増進、社会参加などを行い、高齢者の福祉の向上に寄与するものであるが、近年は全国的に会員の減少傾向がみられる。A 市 B 地区には現在 33 の老人クラブがあるが、65 歳以上人口に占める会員の割合は 6.1% であり<sup>9)</sup>、全国と同様に減少傾向にある。

今回、健康に関する交流会に参加した老人クラブ会員の平均年齢は 77.8 歳であった。うち 75 歳以上の後期高齢者が、全体の参加者の 74.1% を占めており、参加者の高齢化がうかがえた。また、女性の参加が 75.6%、男性は 24.4% と、参加者の 4 分の 3 が女性であり、男性の参加が少ない傾向がみられた。調査日に男性の参加者数が多かった老人クラブがあり、その理由を探究したところ、当日のプログラムは「社交ダンス」であった。老人クラブの当日プログラムのメニューが、男性の参加が必要なものであった場合、周囲から積極的な誘いがあれば、男性の参加が促されるのかもしれない。男性が参加しやすい交流会や健康講話の企画を考えることを課題にしたい。

老人クラブに「ほぼ毎回参加している人」は 70.4% であり、半分以上参加している人と合わせると、87.4% の参加者がほ

ぼ定期的に老人クラブに参加していた。これらのことから、老人クラブの場合は高齢者にとって定期的に他者や地域社会と関わる場になっているといえる。

老人クラブの例会に合わせて実施された「交流会 (11 月)」や「健康講話 (翌年 1 月)」に対する参加者の満足度は、「満足」「少し満足」を合わせると、交流会については 85.2% が、健康講話では 86.7% の者が満足していた。健康講話の内容に関しては、「理解できた」「少し理解できた」で 9 割弱であった。また、同じく 9 割近くの参加者が、内容は「これからの生活に役立つ」「少し役立つ」と回答していた。これらのことから、本学看護学部生との「健康に関する交流会」や「健康講話」は参加者のニーズや期待に沿うものであったと考えられる。また、参加者は本企画に関して、「高齢者が学生を理解する機会になる」60.7%、「学生が高齢者を理解する機会になる」48.1%、「老人クラブが社会貢献する場」になる 20.7% などと回答しており、社会参加、及び社会貢献についても考えていることがわかった。

本事業は、高齢者の健康増進及び社会参加の 1 つになっており、高齢者の福祉の向上に寄与すると考えられる。今後は多くの老人クラブが本事業に参加できるように企画運営の工夫や広報活動を行っていきたい。

#### 3. 老人クラブ担当者のインタビュー結果と考察

##### 1) 担当者インタビュー調査の結果

「健康に関する交流会」を担当した老人クラブ担当者のインタビューの発言内容を抽出・整理した結果、(1) 健康に関する交流会の効果、(2) 健康に関する交流会の課題、(3) 大学との連携に 3 分類することができ、合計 8 カテゴリーが形成された (表 5)。以下分類ごとにサブカテゴリーを「」で、カテゴリーを【 】で示す。

##### (1) 健康に関する交流会の効果

健康に関する交流会の効果は、1 カテゴリーを形成した。「学生との交流は高齢者にとって世代間交流になる」「学生が高齢者を理解するには単位クラブが効果的と思う」から、【高齢者と学生の交流は効果的であるとする】を形成した。

##### (2) 健康に関する交流会の課題

健康に関する交流会の課題は、6 カテゴリーを形成した。「今までの交流会の実態が不明である」「教育効果を判断するのは難しい」などから【交流会の実態や効果の情報が十分でない】を、「行政の仕事は取次ぎと日程調整である」「クラブは日程調整で苦慮したと思う」などから【行政は単位クラブと大学との取次ぎと日程調整をしている】状況であった。また、「単位クラブでは交流会が話題になっていると思う」「他のクラブの交流会への関心は高くないと思われる」から【単位クラブ

表 5 担当者のインタビュー結果

分類	カテゴリー	サブカテゴリー
交流会の効果	高齢者と学生の交流は効果的であると考える	学生との交流は高齢者にとって世代間交流になる
		学生が高齢者を理解するには単位クラブが効果的と思う
交流会の課題	交流会の実態や効果の情報が十分でない	今までの交流会の実態が不明である
		クラブの情報が行政に入らない
		教育効果を判断するのは難しい
		今回のアンケートの結果を知りたい
	行政は単位クラブと大学との取次ぎと日程調整をしている	行政の仕事は取次ぎと日程調整である
		クラブは日程調整で苦慮したと思う
		大学とクラブとが直接日程調整してはどうか
		交流会を行政が PR するには素材が必要である
	単位クラブは、他のクラブの交流会への関心は高くはないと思われる	単位クラブでは交流会が話題になっていると思う
		他のクラブの交流会への関心は高くはないと思われる
	B 地区老人クラブ連合会（地区老連）では交流会が話題にならない	交流会が話題にならない
		会長会議や地区老連では交流会が話題にならない
大学との連携	交流会参加クラブが増加してほしい	交流会参加クラブが固定化している
		高齢化が進むと交流会の開催が難しくなる可能性がある
	行事を老人クラブと協働で企画・開催できるとよい	大学が、行事を老人クラブと協働で企画・開催できるとよい
		学生と高齢者のニーズの把握は必要
		係は異なるが、大学とは孤立と介護予防に関連した連携があると良い

は他のクラブの交流会への関心は高くはないと思われる】を、「会長会議や B 地区老人クラブ連合会（以下地区老連という）では交流会が話題にならない」などから【B 地区老連では交流会が話題にならない】を形成した。さらに、「交流会参加クラブが固定化している」「高齢化が進むと交流会の開催が難しくなる可能性がある」から【交流会参加クラブが増加してほしい】を、「大学が、行事を老人クラブと協働で企画・開催できるとよい」から【行事を老人クラブと協働で企画・開催できるとよい】を形成した。

### (3) 大学との連携

大学との連携については、1 カテゴリーを形成した。「係は異なるが、大学と孤立・介護予防に関連した連携があると良い」「孤立者に関わる方法を研究してほしい」などから【大学と孤立・介護予防に連携できるとよい】を形成した。

## 2) 担当者インタビュー調査の考察

### (1) 健康に関する交流会の効果

A 市 B 地区の老人クラブ担当者は、「学生と老人クラブの交流会は世代間交流になる」と捉えており、学生にとっては高齢者の理解がすすみ、本事業は効果的であると考えている。

高齢者理解に関する先行研究では、高齢者との交流やライフヒストリー・インタビューは、高齢者理解に一定の効果があると述べている<sup>10)</sup>。また、地域の高齢者と看護学生の交流

に関する先行研究では、地域の高齢者は看護学生が真摯に話しを聴く姿勢に触れ、目標に向かって学修する看護学生の芯の強さを目の当たりにし、交流の中で人生の先輩として教訓や応援を積極的且つ自然に伝える姿があったと述べている<sup>11)</sup>。また、地区コミュニティで地域看護教育プログラムを開発した松尾ら<sup>12)</sup>は、市民協力者はコミュニティの問題として健康保持増進に取り組む必要性を認識し、学生に対する学習支援 competence が強化されたと述べている。学外学習の効果に関する先行研究では、学外体験学習が学生にとって看護の喜びや気づきを得るよい機会となっており、学習への動機づけ、意欲を持続するためのインセンティブになっていることがうかがえたとも述べている<sup>13)</sup>。

これらのことから、健康に関する交流会を学習の場として学外で行うことは、学生にとっては高齢者の理解を深める効果があり、また、高齢者にとっては、世代間交流や社会参加の場となっていることが考えられる。

### (2) 健康に関する交流会の課題

健康に関する交流会の企画や内容、効果などが B 地区の担当者や他の老人クラブ会員に情報が少なく、地区老連でも話題になっていないことがわかった。担当者は、健康に関する交流会の実態や効果の情報が不十分のまま、老人クラブと大学間の取次ぎや日程調整をしている実態であった。担当者は、クラブ会員の高齢化が進むと交流会の開催が難しくなる

クラブがあると考えており、健康に関する交流会に参加してくれるクラブの増加を望んでいる。そのためには、大学が老人クラブの行事を協働で企画・運営することによって、老人クラブの健康に関する交流会への協力の仕方が変わるのではないかと考えている。

大学は、交流会の企画段階から老人クラブの意向を十分に取り入れ、学生が考えた健康課題や健康教育のテーマを事前にクラブ会員に知らせるなどの工夫を行い、交流会に参加する会員を増加させたいと考える。また、担当者やB地区全ての老人クラブ会員に、交流会の実態や効果などを広く情報提供する必要がある。さらに地区老連でも交流会の話題を取り上げる機会を作ってもらいなどの方法を考え、多くの市民と学生が交流できるように検討していく必要があると考える。

### (3) 大学との連携

担当者は、地域には一人暮らしや介護予防が必要な高齢者が存在することから、係は異なるが高齢者の孤立や介護予防に関する課題について、大学との連携を望んでいた。

今後、健康に関する交流会を継続発展させていくには、行政、大学、老人クラブが直接会う機会を作ることが必要である。互いの活動内容や課題を共有し、学生も高齢者も満足できる交流会にしていきたい。

## IV. 結論

健康に関する交流会は、学生にとっては高齢者の生活や健康に関する理解を深め、対象に適した看護援助の方法を学ぶ場として効果的である。特に、老人クラブ会員と学生が直接会い、互いの関心や生活や経験などを開示しながらの双方向のコミュニケーションをはかる健康に関する交流会は、健康教育に必要な情報をより具体的な対象のイメージとともに収集できたと推察される。また、老人クラブ会員のニーズに沿った健康教育の計画や実施を仲間と共に考え実践し、対象者から評価を受けるという演習の学びは大きい。

市民にとって老人クラブは、定期的に他者や地域社会と関わる場になっている。老人クラブでの学生との交流は、若者と高齢者の理解の促進、健康講話により生活習慣病や介護予防に役立つ情報が得られるといった参加者のニーズや期待に沿うものであった。また、学生に自らの生活状況等について情報提供を行い教育に協力するという社会参加、地域貢献の場にもなっており、老人クラブの設置目的にも合致するものである。

行政の担当者は、健康に関する交流会の実態や効果の情報が十分でないまま、老人クラブと大学間の取次ぎや日程調整に苦労をされていたが、健康に関する交流会に参加する老

人クラブが増えてくれることを望んでいた。また、地域における孤立・介護予防に関する課題に対して、大学が、老人クラブや行政と連携していくことを望んでいた。

以上のことから、住民・行政・大学との協働による健康教育の演習は、3者にとって効果的であると考えられ、地域看護学の教育プログラムは、地域との連携協働により実施していくことが望ましいといえる。また保健・医療・福祉に関する課題に対して、大学が地域の一機関として役割を担うことが期待されている。

## 本研究の課題と今後の展望

本研究は、平成23年度の交流会の調査であるため、1年限りではなく対象者を変えて調査をする必要がある。特に学生の健康教育演習の評価、高齢者との交流会の効果については、今回の調査以外の視点や経年的な調査も必要である。また、地域看護学においては、地域住民と共に演習する意味や方法についてさらに検討していく必要がある。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた看護学部生の皆様、老人クラブ会員の皆様、行政の老人クラブ担当の皆様にご心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 中村裕美子・渡部月子：健康教育の展開。中村裕美子著者代表、標準保健師講座2 地域看護技術。東京：医学書院, pp.138-172, 2011
- 2) 松下 祐：第5章 健康教育。村嶋幸代編、最新保健学講座3 地域看護支援技術。東京：メヂカルフレンド社, pp.160-165, 2009
- 3) 牧内忍・仲間紀子・川崎道子：地域保健看護学実習における学生の健康教育の改善—学生と指導保健師の評価特典の比較。沖縄県立看護大学紀要 10:55-61, 2009
- 4) 青山京子・古田加代子・佐久間晴美・柳原理子・飯田蓮子：地域看護学実習における健康教育指導案の対象把握の実態。愛知県立大学看護学部紀要 15:71-77, 2009
- 5) 白石知子・伊藤亜希子・佐久間清美・古田加代子・奥水めぐみ・青山京子：地域看護学実習における健康教育の企画段階にみられる看護学生の学習傾向。愛知県立大学紀要 13:25-32, 2007
- 6) 全国老人クラブ連合会：「活動について」2012。  
<http://www4.ocn.ne.jp/~zenrou/>, 2012/07/30
- 7) 古田加代子・佐久間清美・興水めぐみ・白石知子・久米智美・秋山さちこ：地域看護実習における学生の健康教育の実施状況と学びの検討。愛知県立大学看護学部紀要

12:33-40, 2006

- 8) 滝沢寛子・西田厚子・今村香：地区診断と健康教育指導案作成を組み合わせた教育プログラムによる学生の学び。人間看護学研究 3:125-133, 2006
- 9) 阿字吉章:ごあいさつ. 曾我部正編:ちゅうおう第5号. 札幌:札幌市中央区老人クラブ連合会, pp. 1, 2011
- 10) 亀山直子・山本美津子・鳴海喜代子：我が国の論文にみる「高齢者理解」のための教育方法に関する動向。武蔵野大学看護学部紀要 5:41-49, 2011
- 11) 渡邊裕子・森田祐代・流石ゆり子・萩原理恵子・小山尚美・中澤緑・水口哲・森本清・深沢勝彦：看護学生との交流による地域リーダー高齢者の若者イメージの変化。山梨県立大学看護学部紀要 13:27-35, 2011
- 12) 松尾和枝・酒井康江・蒲池千草・小林裕美・稲留由紀子・宮地文子：本学の地域看護学教育に対する宋像市住民の学習支援 **competence** に関する研究。日本赤十字九州国際看護大学 IRR7:35-41, 2009
- 13) 森田孝子・千明政好・片貝智恵：参加型地域公開活動に参加した学生の学習効果「看護の日に当たり健康を考える」学外実地体験に参加した学生の調査から。上武大学看護学部紀要 6(1):28-37, 2010